様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　９ 月　１ 日現在

機関番号：３２６０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｈ０３４５３

研究課題名（和文）21世紀型リタラシー獲得を目指した小中連携の英語プログラムの開発と検証

研究課題名（英文）The development of an effective English program for elementary and junior high school students for acquiring literacy skills in the 21st Century

研究代表者
アレン・玉井　光江（Allen-Tamai, Mitsue）

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：５０１８８４１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、日本の児童・生徒の英語のリタラシーを育てるため、理論に基づくプログラムおよび教材を開発・実践し、その効果を検証した。プログラムの特徴は、音韻認識や文字認識等のボトムアップ能力を効果的にのばすことにある。
小学生を対象の研究では、開発したプログラムを公立小学校（37校）で実践した。導入の過程においてプログラム導入校と非導入校ができたため、その比較をすることでプログラムの有効性を検証することができた。データ分析の結果、プログラムの有効性が証明された。また、中学校研究では、4つの中学校に協力を得て中学校用プログラムを実施したが、データ分析によりこちらでもプログラムの有効性が実証された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、英語圏での研究を十分に調査したうえで日本人の児童・生徒用に開発したプログラムと教材を実際の小学生および中学生に与えてその効果を検証した。そのため、それらは学術的に信頼できるものであり、またすぐに使用できる実行性に富むものである。
小学校の外国語科では英語の「読むこと」「書くこと」の指導が含まれることになり現場では大きな不安が広がっている。そのため本研究で得られたプログラム（指導法含む）や教材は小学校英語に大きく役立つであろう。また中学校の新課程では倍にちかい単語が導入されているが、本プログラムが強調する「読み」のボトムアップスキルを高める指導法は不可欠なものになるであろう。

研究成果の概要（英文）：The aim of the research was to develop an English literacy program for Japanese learners from grades 5 to 7 and to verify its effectiveness. The researchers developed the program and its materials based on previous research and theories and practiced them in real classrooms.
In the research with 5th and 6th graders, the program was implemented in one district in Tokyo. According to its policy, there co-existed students who started the program alongside others who did not. The data showed that the students in the program outperformed the others who were not in the program, in phonological awareness, letter knowledge, and vocabulary knowledge. Thus, the effectiveness of the program was suggested. Adjusting the program and materials for 7th graders, the other research was conducted. The data again showed the importance of developing basic literacy skills such as phonological awareness and letter knowledge to develop their vocabulary knowledge and reading ability.

研究分野：小学校英語

キーワード：小学校英語　読み書き指導　音韻認識能力　文字指導　リーディングストラテジー　リーディング指導　単語知識の発達　リーディングの流暢さ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

文部科学省は平成 25 年に「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を公表し、小中高等学校を通じた英語教育改革を計画的に進め、平成 29 年告示の新学習指導要領において、公立小学校高学年に教科としての外国語、また中学年に領域としての外国語活動が設置されることを明らかにした。本研究は平成 28 年から始まったが、当初から教科化される小学校英語において読み書きの指導が大きな課題になることが予想されていた。また今世紀におけるリタラシーとは単なる「読み書き能力」ではなく、複雑でマルチモードに表現されている書き物を理解し、問題を解決し、コミュニケーションをとる力である（UNESCO, 2004）。英語でそのような力を獲得するためにも早期英語教育における読み書き指導は重要であるとの認識を持った。

２．研究の目的

本研究の目的は日本の児童・生徒が 21 世紀型の英語のリタラシーを獲得することを目指し、効果的なリタラシープログラムを開発、実践し、その効果を検証することである。

３．研究の方法

小学生高学年と中学生を対象とした２つの研究を次のように進めた。

(1) 英語圏および今まで本研究者たちが行ってきた研究や経験に基づき、小学生高学年および中学生を対象とした効果的なリタラシープログラムおよび必要な教材を開発した。
(2) 実験に協力していただく小学校、中学校を探し、プログラムを実践した。
(3) プログラムや教材の効果を検証するために必要なテストやアンケートなどを開発し、参加者の能力や学習動機・態度などを測定し、データを分析した。

４．研究成果

(1) 開発したプログラムと教材について

本研究では前回の科学研究費基盤 B（「英語の初期学習者を対象としたリタラシー教育に関する研究―小中連携の観点から」No. 23320118）で開発した実験校でのプログラムをより汎用性の高いものに改良し、多くの学校で使用できるように具体的な教材を開発することを１つの目的とした。

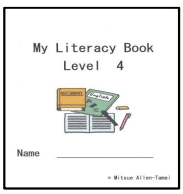
当該リタラシーカリキュラムの特徴は、Bruner(1978)の提唱したフレームワークとルーティーンという考え方に基づいているところにある。それにより学習者は安心して英語による授業活動に参加することができる。リタラシープログラムは授業時間全体の中で 10 分程度の１つの活動に過ぎないが、それを体系的に帯活動として構成しているところにもプログラムの特徴がある。英語圏でのリーディング能力の発達に関する理論を基にプログラムを作成し、現在少なくとも 40 校近くの公立・私立小学校で実践されている。リーディング能力の発達に大きな影響を与えるのはアルファベットの知識と音韻認識能力（Snow, Burns, & Griffin, 1998, Ehri, Nune, Willows, Schuster, Yaghoub-Zadeh, & Shanahan, 2001 など）と言われるが、その理論を日本の児童、生徒に合わせて実現化し、指導するカリキュラムと教材を開発した（図１）。

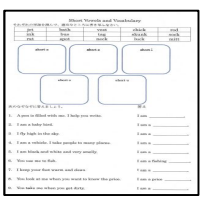
①大文字を認識する(1 文字から複数文字へ)。
②音韻認識能力を育てる（onset を中心に）。
③「音素体操」を行う。
④大文字を書く（１文字から複数文字へ）。
⑤小文字を認識する（1 文字から複数文字へ）。
⑥音韻認識能力を育てる（rime を中心に）。
⑦小文字を書く（１文字から複数文字へ）。
⑧音と文字との関係を学習（フォニックス子音）
⑨音と文字との関係を学習（フォニックス短母音）
⑩音と文字との関係を学習（フォニックス二字一音）
⑪音と文字との関係を学習（フォニックス長母音）
⑫サイトワード
⑬文読み（Decoding 強化）
⑭文章読み(Fluency 強化)

図１　体系化したボトムアップを育てるプログラム

開発した教材 My Literacy Book との対応
My Literacy Book 1 ①～⑥
My Literacy Book 2 ⑦～⑪
My literacy Book 3 ⑧～⑪
My Literacy Book 4　⑬、⑭
My Literacy Book 5　⑬、⑭

例（My Literacy Book 4 より）





ここでは、紙面の関係上小学生を対象とした研究と中学生を対象とした研究のうち代表的な研究の成果について報告する。

(2) 小学 5,6 年生を対象としたプログラムの効果を検証した実験研究について

本研究代表者が開発したプログラムは英語圏のリーディング発達理論に基づき、日本人児童用に開発したものだが、文字の学習、フォニックス、Decoding というボトムアップスキルを丁寧に育てることにその特徴がある。研究を実施していた地域ではその効果が認められ、2014 年から 2017 年の 4 年間をかけて当該プログラムが段階的に地域の全小学校に導入された。これ

により、時期的にプログラムが導入されている小学校とそうでない小学校が混在し、それらを比較することでプログラム効果を検証することが可能になった。本研究者は教育委員会と協力し研究を遂行したが、テストとアンケートの実施に先立ち、研究目的、ならびに個人情報は匿名化され適切に管理されることを文書と口頭で校長と担当教諭に説明し、参加の同意を得た。アンケート、テストのいずれも授業内で実施された。

（ア） 研究方法

参加者は実験群としてプログラムを 2 年経験した 6 年生児童 149 名 (男児 84 名, 女児 60 名, 不明５名)と統制群としてプログラムを 1 年経験した 6 年生児童 604 名(男児 261 名, 女児 261 名, 不明 82 名)であった。

プログラム 1 年目の効果を検証するため、参加者に次の５つのテストを実施した：a) 文字とその名前の理解力を問うテスト、b)名前を聞いて文字を書くテスト、c)単語の始めの部分（onset, body）が理解できる音韻認識能力を測るテスト、d)単語の後ろの部分(rime, coda)が理解できる音韻認識能力を測るテスト、e)スペルを見て３つの中から絵を選ぶテスト、d)スペルを見て日本語で意味を書くテスト。そして 1 年後にプログラム 2 年目と 1 年目を比較するためにリーディングに関する２つのテストを実施した。

（イ） 結果

6 年生の最初に使用した５つのテストの記述統計と分析結果を表１にまとめている。

表１ 各テストの結果と検定結果

テスト	群	*N*	*M*	*sd*	Median	*IQR*	*p*	effect size
文字	実験群	142	28.75	4.43	31	2	$p > .001$	$r = .20$
(読み)	統制群	583	23.95	9.02	29	13		
文字	実験群	142	16.82	3.04	18	3	$p > .001$	$r = .28$
(書き)	統制群	583	13.79	4.83	15	7		
Open	実験群	142	19.15	3.28	20	3	$p > .001$	$d = .54$
(音韻)	統制群	582	16.58	5.06	18	6		
End	実験群	142	19.63	3.77	20	4	$p > .001$	$d = .39$
(音韻)	統制群	582	17.88	4.69	19	5		
語彙 1	実験群	142	22	5.76	22.5	8	$p = .001$	$d = .30$
	統制群	583	20.14	6.25	21	10		
語彙 2	実験群	142	9.43	8.11	8	14	$p = .034$	$r = .08$
	統制群	581	8.02	8	5	13		

(Median = 中央値，IQR = inter quantile range 4 分位範囲)

実験群と統制群の違いを *t* 検定および Mann-Whitney U 検定で分析した結果、文字知識、音韻認識能力、語彙力、全てのテストにおいてプログラム導入群の得点が非導入群より高く、それぞれ統計的に有意な差があることがわかった。

さらに 1 年後同被験者に 2 種類のリーディングテストを実施し彼らのリーディングの力を測った。リーディングテスト 1 では Mann-Whitney U 検定を使用した。

その結果，両群間に統計的な差はなかった(実験群: 11(9)，統制群: 11 (8), $p = .391$)。リーディングテスト 2 では *t* 検定を使用し，こちらも両群間に統計的な差は確認できなかった（$t = .741$, $df = 197.669$, $p = .460$）。

結論として、週 1 時間、毎回 10 分程度の読み書き指導を行った当該プログラムの効果は、1 年目で参加児童のリーディングのボトムアップスキルである文字知識や音韻認識能力、また単語認識能力の発達に効果があったが、2 年目で測定したリーディング能力の発達には影響がみられなかった。

次に文字認識および音韻認識能力がリーディング能力にどのように関連しているかをそれぞれのグループに分けてパス分析を行った。プログラムを 2 年間経験した児童の結果を図 2，1 年だけ経験した児童の結果を図 3 に報告している。

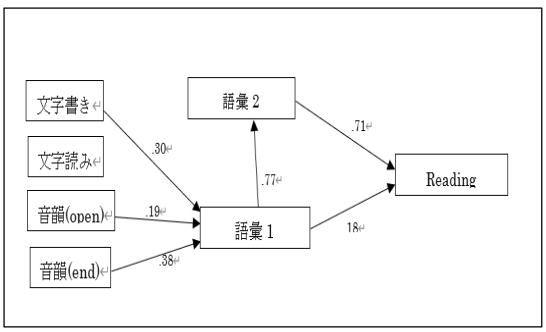


図 2 導入 2 年の実験群の基礎スキルと語彙およびリーディングの関係を表すパス図

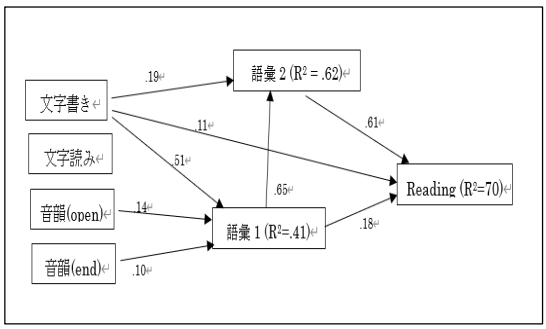


図 3 導入 1 年の統制群の基礎スキルと語彙およびリーディングの関係を表すパス図

プログラムを 2 年間経験した実験群と 1 年間経験した統制群で大きく異なるのは語彙知識に対する音韻認識能力影響度である。実験群では大きく影響しているのに対して、統制群での影響力は小さい。一方、統制群では小文字を「書く力」が語彙知識およびリーディング能力に直接影響していたが、実験群では影響していたのは語彙テスト１のみであった。統制群はプログラム１年目なので、文字知識を増やす活動が中心であった。実験群と比べ、音と文字との学習についてはさほど進んでいない。したがって統制群の児童は教えられた文字知識を最大限に使って問

題を解決しようとし、プログラム２年目の実験群の児童は音と文字との関係をより深く学んでいたのでその知識を使ってテストに答えたと解釈する。

(3) 中学１年生を対象としたリーディング能力の発達を見る横断研究

本科研では中学校の早い段階でフォニックスを系統的に導入することが重要であると考える3名の中学校教員に協力を得て、プログラムとともに開発したワークブックを使用して中学１年生にリーディングのボトムアップスキルを教えてもらい、それがいかにリーディング能力の発達に影響するのかを検証した。テストとアンケートの実施に先立ち、研究目的、ならびに個人情報は匿名化され適切に管理されることを文書と口頭で校長と担当教諭に説明し、参加の同意を得た。アンケート、テストのいずれも授業内で実施した。

(ア) 方法

関東圏の３つの公立中学校に通う１年生 304 名（男子 157 名，女子 143 名）が実験に参加し、５月に３つのテスト: a) アルファベットの小文字能力を測定するテスト, b) 英語の音韻認識能力を測定する２つのテストそして c)語彙知識を測定する２つのテストを受け、そして翌年の 2 月に２つのリーディングテストを受けた。

（イ）結果

最初にこのプログラムを受けた生徒の音韻認識能力と語彙知識にどのような変化がでるのかを検証した。入学後の 5 月と翌年 2 月に音韻認識能力を測るテストと語彙知識を測るテストを実施し、それらを統計処理した。記述統計と結果を表 2 に報告している。

表 2　音韻認識能力と語彙知識の変化

テスト	*N*	*M*	*sd*	*t* 値	効果量
音韻 1 pre	210	18.23	3.93	** 4.01	.27
音韻 1 post	210	19.36	3.39		
音韻 2 pre	210	19.56	3.68	** 4.03	.27
音韻 2 post	210	20.69	3.73		
語彙 2 pre	211	9.89	7.80	**25.08	.87
語彙 2 post	211	19.31	6.45		

** $p < .01$)

対応ある *t* 検定を行った結果、それぞれのテストで生徒は音韻認識能力および語彙知識を伸ばしていたことがわかった。生徒は週 4 回英語の授業を受けていたので授業効果もあるが、プログラムがこれらの力の発達に良い影響を与えていることを示唆しているともいえる。

次に音韻認識能力や文字知識という**ボトムアップスキルとリーディング能力の関連性を見るためにそれらの得点をもとに** Amos 25 を使用して**共分散分析を**行った。図 4 にその結果を報告している。

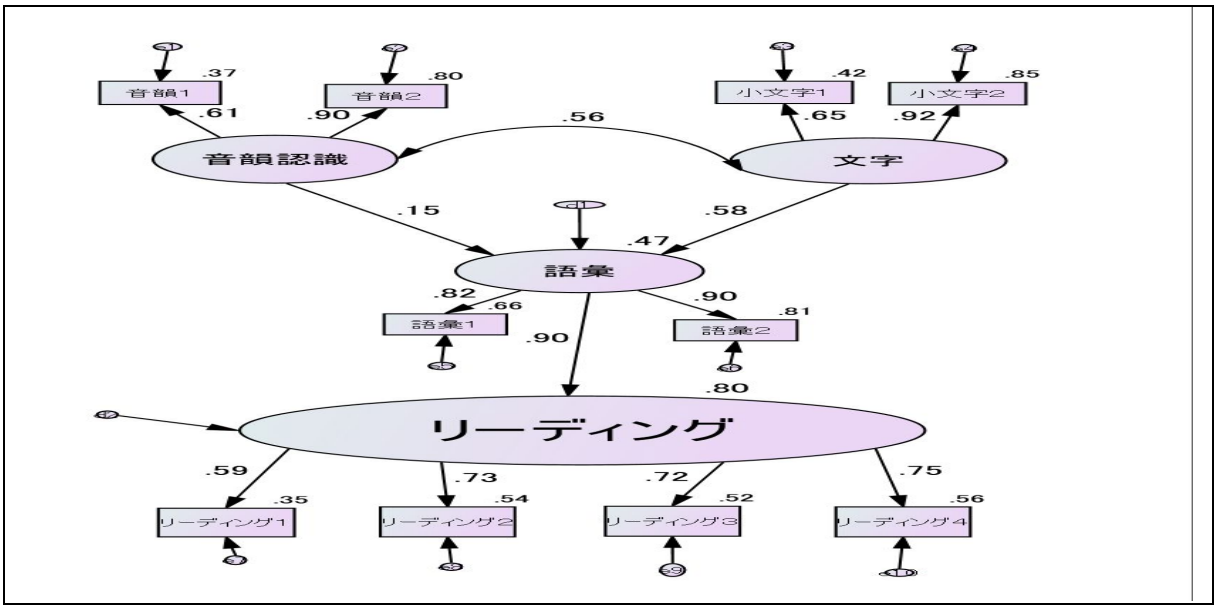


図 4　ボトムアップスキルとリーディング能力の関連性について

カイ二乗値は有意であったが($\chi 2$ = 64.447, *df*=31, *p*=.000), CFI = .973, TLI = .953 **および** RMSEA = .060 **はこのモデルが妥当であることを示している。つまり、今回、プログラムに参加**

した生徒は音韻認識能力や文字知識を使いながら語彙知識得て、それをもとにリーディング能力を伸ばしていることがわかる。そのことにより、今回導入したプログラムと教材は生徒のボトムアップスキルを伸ばし、それらがリーディング能力の発達に影響した可能性があることを示唆している。

(4) リーディングの基礎スキルを育てるワークシートに対する生徒と教員の反応

中学校の研究では、協力いただいた教員はリーディングのボトムアップスキルの育成が重要であるとの認識は同じであったが、異なる教科書を使用し、指導理念も若干異なっていた。そのため、共通のカリキュラムを実施せず、リーディングの基礎的なスキル（文字の知識、文字と音との関連に関する知識）を育てるワークブックを提供することで研究を進めた。そのためワークブックを夏前には終わらせた教員もいれば、1年かけて終わらせた教員もいた。それぞれのクラスでワークブックのアンケートを実施し、その結果を表3に報告している。

表4　ワークブックに対する中学1年生の反応

(私はワークブックのおかげで)	N	M	最頻値	sd
アルファベットの文字と名前がわかり、書けるようになったと思う	295	3.74	4	1.06
アルファベットの文字と音の関係がわかるようになったと思う。	295	3.79	4	0.94
単語が読めるようになったと思う	295	3.66	4	0.98
単語が書けるようになったと思う。	295	3.33	4	1.04
教科書の本文が音読できるようになったと思う。	295	3.29	4	1.07
教科の本文の意味がわかるようになったと思う。	295	3.15	3	1.02
来年の1年生にもこのワークブックを使ったほうが良いと思う。	295	3.9	4	0.95
2年生になってもこのワークブックのようものがあったら良いと思う。	295	4.01	5	0.91

生徒はそれぞれの項目に対して「全然そう思わない」から「とてもそう思う」の5件法で回答した。彼らはこのワークブックが役に立つと判断していたと考えられる。それは「来年の 1 年生も使用するほうが良い」と考えたり、リタラシースキルを伸ばすワークが2年になっても欲しいと答えたりしているところに現れている。ワークブックはフォニックス指導のものが中心で子音から長母音までの学習活動が含まれていた。そのため「音と文字の関係がわかるようになった」、「単語が読めるようになった」という項目に対して評価が高いのは理解できるが、「単語が書けるようになった」、「本文が音読できるようになった」とディコーディング能力が高くなると単語を書いたり、文を読んだりする力につながっていると自己評価しているところが興味深い。しかし「本文の意味がわかるようになった」という項目では評価が低くなっているのは、ディコーディング力と文を解釈する力は異なるものだと彼らが考えていることがうかがえる。

また、教員はワークブックを通して文字と音との関係を理解した生徒の反応について次のようにその効果を述べている：「新しい単語でも自分の力で読み、発音がよくなった。新しい単語でも予測してある程度書けるようになった。フリガナをふる生徒がいなくなった。初見の英文でも読む力がついた」（A 教員）。「未習の教科書本文を自力で音読してみようとする生徒を見かけるのが例年は２月ぐらいだが、１２月にはすでにそのような生徒が出てきた。単語を書く誤りの質が例年と違った（音を基づく間違い）」（B 教員）。「フォニックスのルールを少しずつ覚えて、文字と音が結びつくようになった」（C 教員）。またワークブックを使用することで見られた教師としての自分の変化について尋ねたところ、「段階的に文字の読み方を教えることの大切さに気づいた。英単語や文を読めない生徒がいたときに、ワークブックのどこからやり直せばいいのかという視点で考えらえるようになった」（A 教員）。「単語を意味や品詞でとらえ、生徒に提示していたが、音にも注目するようになった」（B 教員）。「教科書で出てくる新出単語もフォニックスのルールを活用して読み方を説明するようになった」（C 教員）

本研究を通して小学校高学年、また中学校 1 年生という初期学習者にとって英語の読みに関する基礎スキルを丁寧に育てることの重要性が改めて認識できた。また理論に従ったプログラム、またそれを実践するために作成した教材の有効性、そして重要性を検証することができた。

本研究は新型コロナウイルス感染状況が拡大し、小学校・中学校でのデータ収集などが難しくなり 2 年にわたり繰り越の研究を許可いただいた。その間学習指導要領の改訂により小学校および中学校に新課程が導入され、小学校高学年では外国語が教科となり、「読むこと」「書くこと」が導入されることになった。高学年の週1回の授業が週2回になり、現場では予想されていたとおり読み書きの指導が難しいと感じる教員が多い。本研究で行った早期英語学習者における読み書き指導に関する実証研究は当該分野に貢献するものになると確信している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計22件（うち査読付論文　13件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 アレン玉井光江、松永結実	４．巻 37
２．論文標題 外国語教育における音声言語の発達とジェスチャー－物語を中心にしたカリキュラムを使ってー	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日本児童英語教育学会研究紀要	６．最初と最後の頁 19-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 本田勝久・太田　洋・山本長紀	４．巻 19
２．論文標題 小中連携におけるリタラシー活動－TEAを用いた英語教師へのインタビュー分析－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 小学校英語教育学会紀要	６．最初と最後の頁 178-193
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20597/jesjournal.19.01_178	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 "アレン玉井光江，　小林悠，　松永由美	４．巻 90
２．論文標題 "効果的な小学校英語の指導方法を求めて－日本人の英語専科教員の役割ー "	５．発行年 2018年
３．雑誌名 英文學思潮	６．最初と最後の頁 1－17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 アレン玉井光江・泉惠美子	４．巻 38
２．論文標題 小学校英語における文字学習とCan-Do評価－ 客観テストと自己評価の関連性について －	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本児童英語教育学会（JASTEC）研究紀要	６．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計40件（うち招待講演　5件／うち国際学会　12件）

１．発表者名 アレン玉井光江
２．発表標題 We Can!を使用した公立小学校におけるリタラシー指導
３．学会等名 日本児童英語教育学会　(JASTEC)第39回全国大会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 アレン玉井光江
２．発表標題 公立小学校におけるリタラシー指導ー音韻認識能力の発達との関連からー
３．学会等名 日本教育心理学会第60回総会
４．発表年 2018年

１．発表者名 アレン玉井光江
２．発表標題 音声指導から読み・書きの指導ー音を大切にした文字指導
３．学会等名 日本児童英語教育学会第38回秋季大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 泉惠美子・アレン玉井光江・田縁眞弓
２．発表標題 小学校英語教科化における文字指導とCan-Do評価
３．学会等名 第18回小学校英語教育学会（JES）長崎大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 本田勝久・太田洋・山本長紀
２．発表標題 小中連携におけるリタラシー活動の効果-TEAを用いた英語教師へインタビュー分析-
３．学会等名 第18回小学校英語教育学会（JES）長崎大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 豊田ひろ子
２．発表標題 小学生のリタラシー育成に向けた素地作り
３．学会等名 大学英語教育学会SLA研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 アレン玉井光江
２．発表標題 "小学校におけるリタラシー指導　From Spoken Language to Written Language "
３．学会等名 児童英語教育学会（JASTEC)第38回全国大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Mitsue Allen-Tamai,　Katsuhisa Honda
２．発表標題 The role of onset-rime awareness on literacy development among young EFL learners
３．学会等名 The 15th AsiaTEFL International Conference and The 64th TEFLIN International Conference（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Mitsue Allen-Tamai
２．発表標題 An Effective Literacy Program for Young EFL Learners
３．学会等名 International Association of Applied Linguistics, World Congress 2017（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Mitsue Allen-Tamai,　Hiroko Toyoda
２．発表標題 Effective Coordination of Literacy Programs for Young Adolescent EFL Learners
３．学会等名 International Association of Applied Linguistics, World Congress 2017（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 泉恵美子，田縁真弓，　アレン玉井光江
２．発表標題 小学校英語教科化における文字指導とCan-Do評価
３．学会等名 小学校英語教育学会（JES)全国大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Mitsue Allen-Tamai
２．発表標題 The role of oral language in literacy development among young EFL learners
３．学会等名 大学英語教育学会JACET 56th International Convention（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Mitsue Allen-Tamai, Yumi Matsunaga
２．発表標題 The role of oral language in literacy development among young efl learners
３．学会等名 JALT2017 International Conference（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 アレン玉井光江
２．発表標題 新教材に見られる リタラシー指導への挑戦 ~初期リタラシー習得理論を基に~
３．学会等名 小学校英語教育学会（JES）京都支部大会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Mitsue Allen-Tamai
２．発表標題 An innovative literacy program for young EFL learners
３．学会等名 The 14th AsiaTEFL International Conference and 11th FEELTA International Conference（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 Mitsue Allen-Tamai
２．発表標題 A two-year study to investigate literacy development among young EFL learners
３．学会等名 Twenty-Third Annual Meeting Society for the Scientific Study of Reading（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 アレン玉井光江
２．発表標題 公立小学校におけるリタラシー教育ー音韻認識能力と単語認識の関係からー
３．学会等名 第16回小学校英語教育学会
４．発表年 2016年

１．発表者名 山本長紀・太田　洋・本田勝久・町村貴子
２．発表標題 中学校英語教師の変容から捉えるリテラシー活動の効果－M-GTAを用いたインタビュー分析－
３．学会等名 全国英語教育学会（JASELE）第42回埼玉研究大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 アレン玉井光江
２．発表標題 グローバル社会で求められるリタラシーー小・中・高連携の視点からー
３．学会等名 全国英語教育学会（JASELE）第42回埼玉研究大会（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 MItsue ALLEN-TAMAI
２．発表標題 Teaching English to Young Learners through Stories and Assessing their Abilities
３．学会等名 Joint International Conference on English Teaching and Learning in Korea（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 アレン玉井光江
２．発表標題 公立小学校における読み書きの指導ー文字指導の目標とその成果
３．学会等名 日本児童英語教育学会　(JASTEC)第40回全国大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 アレン玉井光江
２．発表標題 「読み」「書き」の基礎スキルに関する児童の Can-Do 評価
３．学会等名 第19回小学校英語教育学会（JES）
４．発表年 2019年

１．発表者名 アレン玉井光江
２．発表標題 小学校高学年児童による英語の文字を読む力と書く力の発達についてー単語認識につながる力
３．学会等名 日本教育心理学会第61回総会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計11件

１．著者名 アレン玉井光江	４．発行年 2019年
２．出版社 東京書籍	５．総ページ数 204
３．書名 小学校英語の文字指導ーリタラシー指導の理論と実践	

１．著者名 アレン玉井光江　（監）	４．発行年 2019年
２．出版社 小学館	５．総ページ数 160
３．書名 小学館　『コナンと楽しく学ぶ小学校英語』	

１．著者名 アレン玉井光江（編集代表）	４．発行年 2019年
２．出版社 東京書籍	５．総ページ数 96
３．書名 New　Horizon Elementary　5（小学校外国語科用文部科学省検定教科書）	

１．著者名 アレン玉井光江（編集代表）	４．発行年 2019年
２．出版社 東京書籍	５．総ページ数 96
３．書名 New　Horizon Elementary　6（小学校外国語科用文部科学省検定教科書）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

本研究に携わっている3名の研究者はそれぞれかかわった小学校外国語科検定教科書の作成において、当該基盤B研究を通して得られた知見を使い、小学校英語におけるリタラシー指導に貢献した。
　また、研究代表者が長年かかわっている東京都のある区においては当該研究で開発したリタラシープログラムが全区で展開され、37の小学校で現在も実施されている。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	太田　洋 (Oota Hiroshi) (30409825)	東京家政大学・人文学部・教授 (32647)	
研究分担者	豊田　ひろ子 (Toyoda Hiroko) (40276209)	東京工科大学・教養学環・教授 (32692)	削除：2019年10月7日
研究分担者	本田　勝久 (Honda Katsuhisa) (60362745)	千葉大学・教育学部・教授 (12501)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関